

115 ジャパン・ブルー（2022年6月9日）

日本の藍染めをご存じでしょうか？藍染めは、人類最古の染料だとする説もあるほど長い歴史があります。世界各地で藍染めが行われ、日本でも古代から藍が使われてきました。藍染めの生地は、防虫効果や消炎効果があり、保温性も高いといった機能性に優れた特徴があります。江戸時代（1603-1868）には、藍染めの生地を使った着物や暖簾が、庶民の生活の中で広く使われました。明治時代（1868-1912）に日本を訪れた欧米人が、藍色をジャパン・ブルーと呼んだほど日本人にとっては象徴的な色です。藍色は、東京2020オリンピック・パラリンピック大会の公式エンブレムにも使われました。

パリ市内にアトリエを構えるベティー・ド・パリさんは、日本の藍（タデアイ）（*persicaria tinctoria*）を使った藍染めを行っています。ベティー・ド・パリさんは、パリで行われた染色作家・芹沢銈介（人間国宝）の展覧会で観た型染めに惹かれて、1980年代に京都で日本の伝統的な型染めを勉強しました。

染料として藍を使うためには、藍の栽培から染料にするまで一年かかります。葉を収穫したらすぐに乾燥させて、秋まで保管します。その時、100日程度の間、寝床と言われる場所で温度や湿度を調整しながら発酵させて、すくも（染）（写真右上）を作ります。灰を溶いた灰汁（あく）、石灰、ふすま（小麦粒の表皮部分）と酒を入れ、すくもを発酵させて染め液（写真右下）を作ります。時期、すくもや他の材料の質によって、1週間から1か月の時間を要します。アルカリ性の環境の中で細菌が発酵することで、すくもに含まれる顔料が変化して染料となります。現在、日本産の藍は、ほぼ全て徳島県で生産されています。ベティー・ド・パリさんは、以前は徳島から取り寄せたすくもを使っていました。しかし、EUの輸入規制強化によって、すくもの輸入が困難となったため、日本の生産者から藍の種を譲り受け、現在では日本原産の種を使って知人の農家がオーガニック農法で栽培した藍（タデアイ）を使っています。布を染め液に浸した直後は緑がかった色に染まりますが、藍は酸化すると青くなる性質があるため、水で洗うと青くなります。染め液に浸して水で洗うという作業を何度も繰り返すと、濃い青色になります。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

型染めには、畳んだ布を板で挟み、板を挟んだ部分の布地を染色しないようにする板締め絞りや型紙を使った染色方法があります。板締め絞りは、染色が終わったら板を外すだけです。型紙を使う場合、白く残したい部分には米粉を原料とする糊を使って染色しないようにします。この日本特有の技法は、米粉以外に何も添加していない糊を水に流しても環境汚染することがないため、環境に優しい染色方法です。

型染めは、同じ材料と技法を使っても、染色される部分の形、色の濃さ、にじみは毎回異なります。藍を使った型染めは、藍色の美しさだけではなく、二度と同じ色や形の作品はできないことも魅力です。



日本の伝統的な藍染めは、天然由来の材料のみを使い、環境に優しい染色方法です。藍染めは、環境保護への関心が集まる現代にあって、時代の最先端をいく染色技法と言うこともできます。残念ながら、日本では伝統技法を使った藍染め職人は少なくなりましたが、フランスで日本の藍染めの魅力に気付きました。



Betty de Paris: <https://www.bettydeparis.com/2013-01-16-13-33-14.html>